

# 図書館だより

## 目 次

|                            |           |
|----------------------------|-----------|
| 第3の場所としての大学図書館             | ——田中 功 1  |
| 女子スポーツ教育の開拓者、成瀬仁蔵          | ——馬場 哲雄 2 |
| レイ・ストレイチー著 栗栖美知子・出淵敬子監訳    |           |
| 『イギリス女性運動史1792—1928』       | ——栗栖美知子 4 |
| 展示「創立者成瀬仁蔵先生 主要著作・参考文献     |           |
| ——日本女子大学学園事典より——           |           |
|                            | ——中曾根 緑 5 |
| 学外利用の視点から～日本女子大学図書館友の会の動き～ |           |
|                            | ——鈴木 学 6  |
| 図書館からのお知らせ                 | 8         |



『成瀬先生記念帖』より

## 第3の場所としての大学図書館

田 中 功

1990年代の前半、アメリカの大学図書館は入館者と貸出数が減少するという図書館界では衝撃的な事態を招いた。図書館に来館しなくともインターネットで学生の多くが情報要求を満たしているといったことが原因の1つとされている。この問題を契機にアメリカの大学図書館では入館者の回復を目標に具体的な改革が実施された。

アメリカの大学図書館300館の調査によると1995—2002年になされた改革、それは場所としての図書館、特に物理的な建物にどのようにして学生を呼び戻すかに集中したことが報告されている。それは徐々に変化していく学生のニーズに即した設備や運営を導入し、快適な知的空間を提供する魅力ある図書館づくりという方向性を示したものであった。いまアメリカの大学図書館では着々とこのような改革を進め、入館者数を増加させるという実績をあげてきている。

時を同じくして1989年、アメリカの社会学者レイ・オーデンバーグは著書『The Great Good Place』の中で「第3の場所」の必要性を提唱し話題になった。それは都市で快適に生活していくためには、3つの場所が必要だということである。1つは「自宅」2つ目は「職場」そしてこの中にあるものが「第3の場所」としている。そこはプライベートな時間を大切にできる空間、すべての役割から解放されるくつろげる場所、身近なところにあって親しい仲間との語らいでストレス社会から気持ちをリセットできる場所などである。

先に述べたアメリカの大学図書館の改革は、まさに図書館がキャンパスの「第3の場所」を創造する必要性の認識であった。図書館にこのようなコンセプトを取り入れ、快適な空間を提供し新しい展開を考えることであった。たとえば大量のコンピュータを図書館に導入し、印刷資料と電子情報を同時に利用できるスペースを設け、「メディアリテラシー」を自ら身につける場としての機能を持たせた。また図書館で友人や教員と出会い、コミュニケーションをとることのできる空間も用意された。そこで語らいが従来の学習、研究、読書という図書館の機能を超えた生産の場、発想力を育む場に拡大されていく効果も見られた。堅苦しさから解放された図書館の変身は多くの学生たちから支持された。その結果、大学図書館はすぐにキャンパスの「第3の場所」になったのである。

憂慮されることは、日本の大学図書館でもアメリカより少し遅れて入館者の減少の波が押し寄せてきていることである。現在、多くの大学ではこの状況をいかに食い止めるかに頭を悩ましており、早急な対策が求められている。最近では「第3の場所」的な発想もみられるようになった。「大学に通う」だけでなく「大学で過ごす」ことが出来るような新しいコンセプトの図書館づくりにむけて動いていかなければならない時がはじまっている。

(図書館長・日本文学科教授)

## 女子スポーツ教育の開拓者、成瀬仁蔵

馬場 哲雄

### 1. 当時の体育事情

わが国の近代的体育の嚆矢は幕末の兵営、藩校に見ることができる。ただし普遍的教育思想を基底とした体育教育が開始されるのは、明治5（1872）年の「学制」以降と言ってよいだろう。具体的にはドイツ人医師のシューレーバー考案の体操図を基にしたものであった。ところが図版に依拠した指導であったために充分な成果はあがらず、生身の体育教師を育成する必要性から、明治11（1878）年に体操伝習所が設立され、そこで育った人たちが全国に派遣されることになる。こうして施行された体育教育は男児に対しては否定的ではなかったものの、女児の場合は遊びとしてみなす人もおり、「小学校女子の体操を当分の間廃止する」との通達を出す京都府のような例もあった。その後、明治17（1886）年頃になると富国強兵との結びつきで、普通体操に加えて兵式体操を教材にするようにとの意見が声高になっていく。確かに鬼遊び、旗拾い、陣取り、陸上競技、球投げといった遊戯も教材として配置されていたが、あくまでも普通体操と兵式体操が基幹であって、遊戯は周辺的な教材に過ぎなかつたのである。そうした傾向は1894～95（明治27～28）年の日清戦争によって、さらに顕在化していくことになる。かくして当時の体育教育の重心は幼児、女子ではなく青年男子に置かれていたのである。とりわけ、女子体育では遊戯的な要素を多分に包含した競争遊戯でさえも、競争性は女性らしさを奪うとして不適切な教材とされた。

さらに高等女子教育機関の体育事情を眺めてみたい。明治19（1886）年に中学校令によって高等女学校は起こされる。しかし規程の制定は、9年後まで待たねばならなかつた。因みに、明治29（1896）年に成瀬は著書『女子教育』で、女性に高等教育が必要であることを江湖に問いかけながら知育論、德育論に加えて「體育論」に25%の紙面を費やしている。先の高等女学校の規程によると、体操（当時の教科名）は13教科の一つとして1～4年生は週3時間、5～6年生は週2時間が課せられていた。男子は兵式体操が週3時間、課外活動が週2時間、合計5時間だったとされるので、如何に女子体育が軽視されていたかが窺える。先述したように明治19年に起こされた高等女学校での体育教育の系譜には、二つの流れがあった。一つは体操伝習所からの流れを汲む女子学習院、女師附属高女などを起流とするもの、もう一つはミッションスクールを源流としたものであった。ただしそれらの実態は形式的であつて、実際に女子体育が喚起されたのは明治20年代の後半と言わわれている。女子体育の場合には服装、儒教的な思想による抑圧といった問題が解決される必要があつた。そうした問題に取り組んだ一人が成瀬仁蔵であったのである。

### 2. 成瀬仁蔵の女子体育観の形成過程

成瀬は明治24（1891）年1月にアメリカへ出立する。その時の旅程記録の一つに「太平洋航海中の所感」という紀行文がある。それによると同船者200人がいたが、その中には日本人、中国人、イタリア人、スペイン人、イギリス人、アメリカ人が含まれており、社会階層もさまざまであったという。観察していると日本人は成瀬自身を含めて13名であったようだが、いわゆる船酔いで多く倒れる。「米人は尤も身體肥満し、大且つ高く日本人は比較的に尤も身小さくして、且つ短く、注船病にかかりし者も、日本人のみにして他は平氣なり」と記して、日本人の身体的劣性を嘆いている。そこで身体的劣性を克服するためには、第一に婦人の教育、第二に早婚の弊を解決しなくてはならないとして思考を敷衍しながら論じている。早婚への懸念は男性へも向けられ、心身の未発達の状態での結婚を法的、教育的に是正すべきだと指摘する。この船上体験は、成瀬の体育必要論の始原の一つとなつたようだ。

成瀬は『女子教育』の例言に、現代においても体育界にその名が知れ亘るスタンレー・ホール、ギューリック、サージャントをあげている。スタンレー・ホールとギューリックはスポーツによる

教育を、サーチャントは科学的な身体測定法を提唱した人達である。当時のアメリカでは、日本でもそうであったが、体育教育の主流は体操であった。しかし体操そのものについても医科学的知見を深化させた体操、つまりドイツ体操からスウェーデン体操への移行が進みつつあった。と同時に学習者の興味を引き出すスポーツによる教育が模索されていた。加えて、アメリカ北部は厳冬を迎える冬季は屋外での授業に支障をきたしたので、屋内でもできるスポーツが希求されていた。そのようにして誕生したのがバスケットボールとバレーボールであり、その誕生の理論的提唱者が自然主義・開発主義者のホールとギューリックであったのである。ところが、新しく考案されたバスケットボールはゴールがバスケットというだけのまさしく男性用のフットボールもどきであり、女性には不向きとされた。男性用と見なされていたバスケットボールを女性もできるバスケットボールに変容させたのがスマズ女子大学のベレンソンという女性体育教師であった。彼女は歩数の制限、身体接触の禁止、攻守範囲の限定といった点を改良することによって、女性には体力的に無理とされた課題を解消させ、さらにはパスが多用される結果は、個人が目立つスタンドプレーを減少させて社会性を生み出すゲームへと仕立てていったのである。成瀬はそうした産声をあげたばかりのバスケットボールに遭遇したのであった。成瀬が後に掲げる教育の三綱領の一つである「共同奉仕」、すなわち社会性を身につけさせるという標榜は、誕生して間もない女子バスケットボールからも大いなるヒントを得たと思われるのである。

### 3. スポーツ教育と新しい女の誕生

先述したように、成瀬がアメリカへ出立する前から女子体育に歓迎されなかったものは競争性である。競争性は女性性を喪失すると考えられていたからである。確かに、二代目校長であった麻生正蔵は対校戦に反対している。たとえば、1923（大正12）年の雑誌『婦人世界』には、対校戦の是非に関する各地の校長アンケートが記載されている。40人の内、賛成が20人、条件付賛成が11人、反対が9人である。麻生は反対の回答者の方に名を連ね、しかも、反対理由の文面が最も長い。その理由には「女性の心身に適合した競技を行わせるべきだ」、「過激であり健康を害する」、「女性は感傷的で愛校心が増大する」、「一部のスター選手がつくられる」といったことをあげている。だが、麻生は「わが校の体育は創立時から新体育（競争性を含んだ体育教育）であった」と述べ、第二次世界大戦後になって、ようやくわが国の体育教育のバイブルと称され、教育課程の骨格として用いられたキャシディーとウッドの "New Physical Education" を、昭和3（1928）年の時点で『家庭週報』に要訳している。つまり、麻生は新体育＝スポーツによる教育の推進者でもあり、対校戦には反対したが、競争性を伴うスポーツ教育そのものは否定しなかったのである。

成瀬、麻生らのスポーツ教育の重視は、やがて日本女子大学卒に多いとされた新しい女の創成に何らかの形で寄与したと思われる。というのも "Sport" の語源には「～からの解放」という意味が含意されており、スポーツする女性は古い桎梏からの自由、解放をスポーツすることで体感できたからである。「新しい女」と揶揄され、青鞆社の立ち上げに関わった平塚らいてうは手記に自分がテニス、バスケットボールを行っていたばかりか、高村智恵子がテニス、自転車が得意であったことを体験的、目撃的に記している。また、らいてうは運動会のとりであった日本式バスケットボールの試合でチームが敗北して、悔し涙を流したことも記している。文学好きで、内省的と思われるらいてうをそれほどまでに高揚させたスポーツは、「男子が婦人化するのは醜であるのは言うまでもないが、女子が男子化するのはまた醜である」といった呪縛で覆われた女子体育観を拭させ、むしろ解放のために飛翔する力を培養させていたのではなかろうか。サリー・ミッセルが「自転車に乗る女は新しい女であった」と述べているように、らいてうたちも体操ではないスポーツによって自由、解放といった感性を体現化していたと思うのである。その点でベースボール、自転車、バスケットボール、ゴルフ、ホッケーといったスポーツを他校に先駆けて体育教材として採用した日本女子大学校には多くの新しい女の予備軍がいたことになろう。（現代社会学科教授）

レイ・ストレイチー著 栗栖美知子・出淵敬子監訳  
『イギリス女性運動史1792-1928』

栗栖 美知子

本書は、1928年ロンドンではじめて出版された。原題は *The Cause: A Short History of the Women's Movement in Great Britain* で、本邦初訳である。原題の *The Cause* には日本語に訳した場合、一言では言い表せない大きな意味がある。故ダイアナ妃が生前、地雷撲滅運動をはじめとする多くの社会運動にかかわっていたことは有名だが、これも英語では 'Cause' のために貢献したと言われている。本書は、19世紀の英國ではっきりとした形をとって推し進められ、女性参政権獲得に至るまでの女性解放を目指した様々な女性の権利獲得運動の軌跡が、ある時は劇的である時は冷静な歴史的視点に立ちつつ、パノラマのように語られた通史になっており、ここには、読者の興味をとらえて離さない著者の優れた語りの技術がある。

本書が19世紀半ばから組織的に行われたイギリス女性運動史を学ぼうとしている人々にとって必読書とされている理由の中でも、ユニークなものが2つある。それは、著者レイ・ストレイチー自らが、女性参政権獲得運動に直接深くかかわったアクティヴィストのひとりであったこと、また、本書が80年間にわたるイギリス女性史の最重要期を取り扱い、女性の普通選挙権獲得が成し遂げられた1928年と同年に出版された点である。これらの要素は、イギリスにおける女性運動の歴史のクライマックスを鮮やかに伝え、臨場感あふれる効果を上げている。その一方で、レイ・ストレイチーの視点は、女性史の裏と表を詳細に把握し、あくまで冷静で客觀性を失うことではない。

レイ・ストレイチーは、アイルランド出身のイギリス人の父親とアメリカ人の母親の間に生まれ、ケンブリッジ大学を卒業し、当時の女性としては経済的にも教育的にも恵まれた進歩的な家庭環境にあった。19世紀イギリスにおける女性解放運動は、このような中産階級または上層中産階級の女性たちを中心に、「女性の個人的、法的、政治的、社会的な自由」を確かなものとして手に入れるために繰り広げられた。ストレイチーは「女性運動の眞の歴史は、19世紀全体の歴史である。その当時起こったすべてのことは、進行しつつあった大きな社会変化に関連していないものはない」として、これらの各方面で進みつつあった女性たちの主張を同時多発的に取り上げ、それぞれの運動のありさまと意義を示すとともに、複数の運動が相互にどのような影響を及ぼしあっていたかをつまびらかにする。

本書は、21章からなっており、「家庭という監獄」、「社会参加の拡大」、「ケンブリッジ攻略」、「女性医師」、「性病予防法」、「初めての組織運営」、「女性労働の必然性」、「戦闘的運動の始まり」、「女性参政権の獲得」、「新しい女性像の受容」などの章のタイトルだけを見ても、この当時の女性たちが、人間は男女にかかわらず生まれながらに平等な自由を有するのだというフランス革命により確信された考え方に基づき、「女」というよりは一人の人間として、市民として社会で認められて生きるために、直面し乗り越えなければならなかつた障害の多さがうかがわれる。一見男性たちに守られ、庇護されているように見える女性たちが味わっていた日常的な閉塞感は、フローレンス・ナイティンゲールが苦しんだ「家庭という監獄」から出て社会進出を果たすまでの葛藤に如実に表され、我が子の親権を夫と争ったキャロライン・ノートンの場合は、妻であることがいかに無力であるかを浮き彫りにし、女性として母としての自立を果たすための実力行使に向かうさまが提示されている。女性にとっては、男性と同様の高等教育を受けることは至難の技であった。その現状を開拓しようとして自らケンブリッジ大学での女性の高等教育に挑んだエミリー・ディヴィスや「女性医師」を目指したソファイア・ジェクス-ブレイク、売春婦の人権を認めさせるために「性病予防法」の廃止に全力をささげたジョゼフィン・バトラーなどの運動は女性の静かなる闘争心に支えられている。女性運動の組織化を志向し女性参政権獲得を目指す女性たちが稳健派・戦闘派に分裂と再生を繰り返しながら選挙権を熱く粘り強く勝ち取っていく過程を経て、女性が参画する歴史の舞台が繰り広げられている。

翻訳には、原書にはなかった数多くの写真や訳注、年表、地図、当時の政治的背景を示すイギリス国会の議事進行や歴代内閣の情報など多くの付加価値が備わっていることも特徴となっている。

## －目白・西生田 図書館玄関ホール展示－

### 「創立者成瀬仁蔵先生 主要著作・参考文献 －日本女子大学学園事典より－」

今年は創立者成瀬仁蔵先生の生誕150年にあたり、本学では各種の記念事業を計画・実施しています（本学ホームページ「日本女子大学成瀬仁蔵生誕150年記念事業」参照）。

図書館では、2008年6月10日（火）より8月29日（金）まで、目白・西生田図書館玄関ホールにおいて成瀬仁蔵の主要著作・参考文献の展示を行っています。図書館でこれまでに行った成瀬仁蔵関係の展示としては成瀬記念館落成を記念して行った「成瀬仁蔵先生著作展示」（1984年10月18日～12月21日）があり、この時は、単行本（著書、小冊子、部分執筆）のほか成瀬が学内外の雑誌に執筆した雑誌記事も展示しました。

今回の目白図書館の展示では、2001年12月発行の『日本女子大学学園事典』（日本女子大学編集・発行）に掲載の成瀬仁蔵主要著作・参考文献29点を基本とし、『事典』発行後に出版された図書など数点を加えて構成することとしました。この展示内容は上述の本学ホームページ「記念事業」内で紹介している成瀬仁蔵関連著書とほぼ重なっており、その情報に合わせて現物を展示でご覧いただける機会となっています（但し、展示資料の版・刷や装丁はホームページ上で紹介中のものと必ずしも同じではありません）。西生田図書館では目白と同様の対象の中から、展示スペース等の関係上、7点を展示しています。

目白・西生田で展示中の資料の一つに『成瀬先生記念帖』仁科節編 桜楓会出版部 1936年刊 があります。日本女子大学校の建設とその発展、成瀬先生の生い立ちと其の永世/遺墨を内容とする和綴じの写真集で、展示期間中には何度か開くページを変えてご覧いただく予定です。

展示は入館ゲートに入る手前の玄関ホールで行っています。お気軽にお立ち寄りください。



『成瀬先生記念帖』展示風景



目白玄関ホール展示風景

（館員・情報サービス課長 中曾根緑）



### 目白・西生田図書館「教養特別講義1 関連図書コーナー」紹介

「教養特別講義1 関連図書コーナー」は、後藤祥子学長が教養特別講義1のために推薦された日本女子大学関係資料のコーナーです。学長のご推薦は、①創立者成瀬仁蔵先生に関する資料、②日本女子大学史に関する資料、③卒業生に関する資料で構成されており、このうち①②を当コーナーでご覧いただけます（一部、キャンパス間取り寄せなどが必要な資料もあります）。また③を含む推薦資料リストを配布用に備えています。目白・西生田図書館2階「教養特別講義1 関連図書コーナー」の図書をぜひご利用下さい。

## 学外利用の視点から～日本女子大学図書館友の会の動き～

### 地域開放と学外者の図書館利用

「大学と地域社会や産業界との連携・交流の強化を図ることは、大学がその知的資源をもとに社会の発展に貢献し、大学の教育研究の活性化にもつながることから、積極的に推進すべきである」（『学術情報基盤の今後の在り方について』第Ⅱ章「学術情報基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方について」（2006.3）より）と指摘され、国立大学を中心として大学図書館の地域開放の動きが近年活発化している。この執筆にあたり大学名の非公開を前提とした聞き取り調査を数校に行った。内容は、図書館友の会設置の有無について、地域開放のやり方や学外者の利用について、の2点である。9校の大学図書館に対して調査した。

従来から紹介状を介した学外者の利用を行っているやり方や卒業生の利用は、調査したすべての大学で行われていた。それ以外に、キャンパス所在地域の自治体との連携による閲覧許可制度や、地域的な協議会加盟等を条件とした周辺大学との協定に基づく利用制度、複数大学間でのコンソーシアムに則った制度が見られる。ただ、地域開放を実施する場合には、本来の中心的な利用者である教員や学生への（生じたことも含めた）影響を心配する回答があった。また、資料の貸出については、会費を伴う登録制を採用しているところも見られた。

### 図書館友の会の動き

日本女子大学図書館友の会（以下「友の会」と略す）は、日本で初めて発足した友の会組織である。一般に言われている図書館友の会の目的とは、図書館とは独立した存在でありながらも組織的な後ろ盾となり、図書館事業の振興と、貴重資料の購入の場面などの財政面の助成をすることがある。事実「友の会」の規約にも「図書館の充実発展に寄与すること」が謳われている。さらに「友の会会員資格については特に制限はなく、図書館とその発展に深い関心を持つことが最も求められる資格です」とされている。また図書館から友の会組織へは、友の会の事業・企画の相談や、活動に対する示唆を行うことが求められている。

このような図書館友の会の組織活動が日本女子大学以外に存在するのか。聞き取り調査によれば、図書館友の会がある大学図書館は皆無であった。学外者に対する図書館利用は進んでいるものの、閲覧を基本的なサービスとしていて、資料の貸出には一定のラインをもうけていると言ってよい。その点、「友の会」の制度は、閲覧・貸出では学生と同じような条件で図書館を利用できるだけではなく、設立から図書館組織との相互関係が確立され、一般に受け止められている学外利用者に比べればより密接な関係にある。

### 図書館友の会総会報告

平成20年5月21日、前日の悪天候とはうってかわってまさに台風一過のようなさわやかな五月晴れのなか、「第43回日本女子大学図書館友の会平成20年度総会」が開催された。開催回数にもあるように、第6代学長の上代タノ先生により1965（昭和40）年6月23日に設立された図書館友の会は43年目を迎える。毎年この時期に開催される総会では前年度の事業活動および決算と当年度の事業予定および予算が報告される。

今年度は、会長に後藤祥子先生、副会長に出渕敬子先生を迎え活動を始めている。開会の辞の後、後藤会長からご挨拶があり、携帯電話で配信される小説類の気軽さを指摘し、その一方で内容の質と「学生の図書離れ」の懸念とともに友の会による図書館支援の重要性についても述べられた。続

いて出渕副会長から、今年度より着任された館長の田中功先生を、ご自身の館長時代のエピソードを交えて簡単に紹介され（出渕先生が館長在任当時、田中先生は図書館事務部長に就かれていた）、引き続いて田中館長より挨拶があった。田中館長は挨拶の中で学生時代の思い出話を織り交ぜながら、国内の大学図書館での図書館友の会の活動自体があまり活発ではないことを述べられるとともに、図書館友の会の意義について海外での様子を交えて解説をされた。

議事では、平成19年度事業として、図書館への資料購入援助のほか、本学卒業生著作調査および目録作成、総会・講演会報告、講座・読書会として5つのコースをもうけていることや、4回の見学会・研修会の実施、会報の発行などが報告された。続いて平成19年度決算報告および監査報告、平成20年度事業計画および予算計画についての提案がなされ、いずれも拍手を持って承認された。

引き続いて、田口図書館情報受入課長より図書館報告が行われた。そこでは、友の会支援による購入資料についての報告、平成19年度図書館統計に基づく利用状況の報告がなされた。報告後、学生数に比べて貸出冊数が少ないようだとの指摘が会場よりあった。後藤会長の挨拶にもあるように、IT技術に慣れた学生が図書館以外に情報を求める傾向について、IT技術そのものとともに図書館として注視していく必要を感じた。



講演をされる山本和代氏



出渕副会長(左) 田中館長(中) 後藤会長(右)

休憩の後、山本和代氏により「生涯学習を問う：各自の生き方を通して」と題した講演が開催された。講演は、まず生涯学習そのものについての成り立ちを述べた後、教育者成瀬仁蔵の姿を浮かび上がらせるとともに、生涯学習は既に「調和」という言葉をもって成瀬先生の思想に含まれていたことや共同奉仕の考え方をボランティアと結びつけて述べられたなど、氏の語気ともども力に満ちた内容であった。

大学の附属機関として教育活動を資料面から支えてきた図書館は、それに加えて今後は生涯学習を焦点とした利用者サービスをいかに築いていくかが問われることになるだろう。すでに生涯学習の場として日本女子大学には通信教育課程の長い歴史があり、さらには生涯学習センターの活発な動きがある。そして、（社）日本女子大学教育文化振興桜楓会の活動もある。サービスの安定と拡大を行いながら、質的な充実をよりいっそう高めていくためにも〈友の会〉との密接な関係を維持していくことがさらに必要となると思われるのである。

（館員・西生田図書館 鈴木学）



\*図書館友の会事務室：白目の図書館5階。入会等お問い合わせは電話03-5981-3183（月～金 10～16時）

平成20年度講座・読書会ご案内 <http://www.lib.jwu.ac.jp/08kd.html>

## 図書館からのお知らせ

図書館では、平成18年度に実施したアンケート結果に基づく改善の検討・実施とともに、館内に設置した意見箱、館員に寄せられた声を真摯に受けとめ、サービスの向上に取り組んでおります。

この取り組みを皆様にご理解いただき、より一層ご利用いただけるよう、2007年4月～2008年5月に開始もしくは改善したサービスを、下記のとおり、時系列でご紹介します。今後、更なるサービス向上に努めてまいります。最新情報は図書館ホームページでご覧ください。

### 日本女子大学図書館サービス向上への取り組み(2007年4月～2008年5月)

- 配布用日程表を見やすい形式に改訂(4月)
- 目白ブラウジングコーナーの椅子をきれいなものに交換(4月)
- 目白5階AVブースを3から4ブースに増設(4/4)
- 西生田玄関ホール展示初回開始(4/4)
- 雑誌JJ, CanCam, Vogue Nipponを  
目白で購入開始(5月)
- 「講談社現代新書」の全点購入を  
西生田でも開始(5月)
- 温度計を増やし空調管理の対応を依頼(6月)
- 目白1階OPACプリンター  
カラー出力可能な機種になる(7/10)
- 2007年度より試験期の1週間前から  
通常より30分早く開館(7月)
- 西生田1, 3, 4階に書架を増設(8月)
- 図書館ホームページリニューアル(9/20)
- 目白2～4階(図書フロア)への  
かばん類持ち込み解禁(10/23)
- 「学生が読みたい本」第1回実施(10月)
- 館内の壁掛け時計を増加(12月)
- 「コピー機の基本的な操作方法」を  
目白コピー付近に掲示(12月)
- 雑誌Vogue(American ed.),  
Harper's bazaarを目白で購入開始(1月)
- 西生田コピー機更改(3/5)
- 目白2階複写機脇に館内利用図書返却台を設置(3/21)  
<2008年度>
- 「教養特別講義1関連図書コーナー」設置(4月)
- 館内設置メディアセンターパソコン運用開始(5/7)
- 「学生が読みたい本」第2回実施(5月)

### 2007年度実施した利用者向け講習会

- ☆「新任教員の集い」図書館利用案内(4/2 12名参加)
- ☆1年次オリエンテーション<目白・西生田>
  - スライド上映: 4/5 西生田, 4/6-7 目白
  - 図書館案内: 4/5 西生田(自由参加形式 138名参加)
- ☆新大学院生オリエンテーション<目白>
  - 4/5 理 13名参加, 4/12 文・家政 12名参加
- ☆研究分野別ガイダンス
  - <目白>
    - 英文 16回 236名参加, 児童 4回 136名参加
    - 物質生物 1回 8名参加
  - <西生田> 心理 2回 24名参加
- ☆資料検索講習会<西生田: 5/28～7/10>
  - 蔵書検索 10回 37名参加, 新聞 25回 52名参加
  - DB 日本語 19回 54名参加・英語 15回 18名参加
  - RefWorks 日本語 10回 13名参加・  
英語 3回 4名参加
- ☆ProQuest ARL 講習会<目白: 6/28>
  - 初級 9名参加, 中級 5名参加



今年度も開催しますので、  
ふるってご参加ください。  
卒論等論文作成のご相談  
は隨時、参考係でお受けし  
ております。

編集後記 6月23日は成瀬仁蔵先生の生誕日。150年記念の年である。馬場哲雄先生に成瀬先生関係での原稿を依頼、女子体育・スポーツの観点で寄稿いただいた。栗栖美知子先生には監訳書の紹介をお願いした。両先生の頁に女性の解放、新しい女という共通項が見いだされ興味深い。4月就任の田中功新館長による巻頭言が始まった。巻頭写真は玄関ホールに展示中の『成瀬先生記念帖』より成瀬先生作詞・書。(中曾根)